様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０６８２

研究課題名（和文）東アジアにおける大蔵経的世界の形成と日本中世

研究課題名（英文）The Formation of the Daizo-kyo Sutra (The Tripitaka)-Style World and Medieval Japan

研究代表者
上川　通夫（Kamikawa, Michio）

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：８０２６４７０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：　10世紀から12世紀に時期を絞り、日本列島の古代から中世への転換期に、仏教が本格的に組み込まれていく実態を考察した。その際、東アジア世界における共時的な動態に注目し、仏教を媒介とする外交関係や文物往来の中で、日本国家が抱いた独自の権力理念について論じた。同時に、被支配民衆が地縁社会を形成する動きに注目し、その中心的よりどころとして、主体的に仏教が担われることを論じた。これら、国家と民衆の史的動態を総合し、12世紀中葉の日本を、東アジア世界からの日本中世析出と位置づけた。
　以上のことについて、単著『日本中世仏教と東アジア世界』などで示した。

研究成果の概要（英文）：I squeezed time in the twelfth century from the tenth century and considered the actual situation that Buddhism was incorporated in in earnest at turning points from the ancient times of the Japanese Islands to the Middle Ages. I paid attention to a synchronic change in the East Asia world and lectured about the original power idea which Japan nation held in diplomatic relations and civilization traffic to assume Buddhism mediation on this occasion. The cover rule people paid attention to movement to form a community of a shared territorial bond at the same time and it was independent and, as the central support, discussed that Buddhism was taken. After considering these, a nation and the historic change of the people, I placed Japan of the middle with separation in the Japanese Middle Ages from the East Asia world in the twelfth century.
In single work, "the Japanese Middle Ages Buddhism and East Asia world ," I showed a part of the result.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本中世史　仏教史　東アジア世界　大蔵経　一切経　山寺

１．研究開始当初の背景

歴史的世界としての東アジア世界についての研究蓄積を重視しつつ、双方向的・多元的な国家間関係史や諸地域関係史、さらには東アジアより一層広域の世界へも目配りしようとする研究傾向がある。このような研究段階に学びつつ、10 世紀から 12 世紀に東アジア世界から日本中世史が析出される過程を復元する課題が立ち現れた。しかも一方、日本中世仏教形成過程について、東アジア世界との関係で捉え直す課題が浮上しており、そのことを組みこんだ日本中世成立史研究が不可欠であるとの認識をもった。

1980 年代からの日本中世史研究は、国家機構や政治と不離一体の仏教史的史実を明らかにするとともに、仏教史料論としての写経研究や聖教研究が前進し、大蔵経等の調査報告書の刊行も相次いだ。また、中国史研究からの大蔵経研究に重要な基礎が据えられ、中国の仏典類調査が進展し、報告書や図録類には新発見事例も目立った。

以上の動向を総合する方法を模索し、「大蔵経的世界」という仮説的枠組みによって、東アジアという歴史的世界を再考することとした。その際、研究代表者自身の単著『日本中世仏教形成史論』（2007 年）『日本中世仏教史料論』（2008 年）で得た見通しに、より堅固な成果を築く意図を持った。

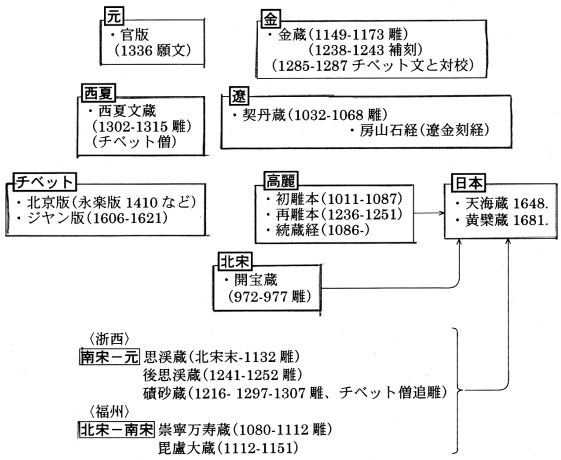
２．研究の目的

日本中世形成史が、歴史的世界としての“東アジア”の中から析出されたことを解明し、「国風文化」という閉鎖的な歴史認識再考の手がかりを得ようとした。具体的には、10 世紀から 12 世紀の史的過程を、仏教史への着目によって再構成しようとした。

本研究で注目した漢訳仏書群、すなわち大蔵経（一切経）は、東アジアの歴史的世界が、共時的に連動していたことを知るための具体的な手がかりである。分裂期中国の統一に並行して遂行された大蔵経出版計画は、北宋皇帝による画期的事業であったが、遼、金、高麗に同様の事業が誘発され、のち西夏、元、チベットにも波及された。高い関心をもった日本では、写経事業が本格化したが、同時にそれは、仏教が日本の社会と国家に本格的に組みこまれる過程であった。世界の中の日本史を考える素材として、平安時代中後期の歴史像を再考する目的を据えた。

３．研究の方法

本研究で仮称する「大蔵経的世界」、すなわち東アジア世界については、下図のようなイメージをもっている。



【図】刊本大蔵経と東アジア世界

方法として次の三本柱を据えた。

①中国・朝鮮等の大蔵経史料の調査・収集

②日本写経における中国・朝鮮刊本大蔵経の痕跡探査

③「一切経年表―十二世紀末まで―」の第二層構築

①②について、主には国内で、既刊文献の探査や、所蔵機関での調査を計画した。基礎データの蓄積が第一の課題であり、中国・韓国での原本調査をも予定した。網羅的研究は不可能であるので、効率的かつ確実な知見獲得を目指し、先行する調査者との連携や所蔵機関との連絡に留意した。

③については、経典等の史料だけではなく、古文書・古記録等に目を配り、いくつかの個別事例を詳細に検討する作業とな

る。以前作成した「一切経年表―十二世紀末まで―」をインデックスとして役立て、関連事項の史料収集によってデータの第二層の構築をめざした。

個別の考察を随時行い、最終年度（４年目）となる平成 25 年度には、東アジアの大蔵経的世界と日本中世の成立がいかなる関連のもとに進行し、そこにどのような歴史の特質と意義があるかについて、相応の分量と内容で叙述することとした。

４．研究成果

中国・朝鮮等の大蔵経史料の収集については、調査報告書や図録類の収集を中心とすることとなった。予定していた中国での調査は、たまたま日中関係の政情不安による渡航抑制が所属機関長から通知され、2 度断念した。2012 年度には、韓国の仏教史跡を巡見し、海印寺版大蔵経と板木を現地で実見したほか、研究資料収集を進めた。ただ、現地での原本調査は捗らなかった。

一方、2012 年 10 月に佛教大学宗教文化ミュージアムが開催した国際シンポジウム「東アジアと高麗版大蔵経」では詳細な調査成果に基づく研究報告が公開され、当該研究が新段階に入ったことを知り得た。また、国際仏教学大学院大学による古写経研究は、12 世紀を中心とする七寺一切経（愛知県）や金剛寺一切経（大阪府）について詳細なデータを蓄積・公表しはじめており、日本の古写経が有する中国・朝鮮の大蔵経との関連背景についても分析しやすくなった。さらに、愛知県史編纂室による文化財調査では、岩屋寺の南宋版大蔵経を調査しており、成果公表の段階に来ている。これら組織的な調査・研究から学ぶ点が大きく、その成果を吸収する一方、本研究ではこれと連動する個別研究に狙いを修正した。ただ、愛知県豊橋市の普門寺には、17 世紀の黄檗版大般若経が伝えられており、その悉皆調査によって、地域社会の主体的な仏典受容の具体相を知ることができた。このことは、本研究が課題とする 10 世紀から 12 世紀における日本中世仏教成立史を、地域社会の側から考察する視点を導いた点で、重要な成果である。普門寺所蔵史料については、本研究の具体的な調査・研究対象として、研究過程で浮上することとなった。

以上の経緯を踏まえ、2012 年に、研究成果の中間報告と若干の軌道修正を試みるため、単著論文集『日本中世仏教と東アジア世界』を刊行した。その構成は、序・日本中世成立史研究の一視角、第Ⅰ部・東アジア世界と日本中世仏教（古代仏教と対外関係、寂照入宋と摂関期仏教の転換、末法思想と中世の「日本国」、日本中世仏教の成立）、第Ⅱ部・中世仏教と政治権力（密教文献と中世史、真福寺本『覚禅鈔』「如法尊勝法」、如法尊勝法聖教の生成、尊勝陀羅尼の受容とその展開）、第Ⅲ部・中世仏教と地域社会（中世山林寺院の成立、平安末期の山林寺院と地域社会、三河国普門寺の中世史料、中世仏教の地域的展開）、結章・日本中世史と日本中世仏教、である。このうち第Ⅰ部と第Ⅱ部は、本研究課題に即した個別論文を収録した。大蔵経そのものではないが、東アジアの大蔵経的世界との関係で、多様な仏教文物が生成する実態を、日本中世成立史の重要部分に位置づけた。第Ⅲ部は、本研究課題の遂行課程で浮上した視点による新稿を含む諸論文である。特に、先述した普門寺（旧三河国）での史料調査の成果にもとづき、12 世紀の地域社会で主体的に仏教が導入される様相を解明した。東アジアにおける大蔵経的世界の中から、日本中世社会と日本中世仏教が析出される過程について、一地域の具体例によって描いた。

東アジアにおける大蔵経的世界の中から析出される日本中世社会について、普門寺の史料調査を継続し、約 3,000 点の史料を目録化しつつある。なお継続中であるが、2016 年度に計画されている豊橋市美術博物館での

企画展「普門寺展」（仮称）において、文献部門として参加し、考古学、美術史学、建築史学との共同で成果を構築する予定である。普門寺の文献調査では、多くは近世史料ながら、中世史料も確認している。中でも、永暦2年（1161）僧永意起請木札は、内容と形式の双方において個性が強く、前掲単著第Ⅲ部で詳述した。他の研究論文でも分析を加えたほか、木簡学会等で口頭報告し、多方面からの研究を呼びかけている。

研究成果については、当初計画した大蔵経原本や刊本のデータ集成だけではなく、地域社会側からの東アジア仏教導入という新視点を加えることとなった。そのため、「一切経年表」を充実させる作業はなお継続中だが、日本中世仏教ないし日本中世社会の形成史を、地域社会における深部の動態から考察する新方法に接近しつつある。家・村の成立、地縁社会の成立といった列島史上の画期と、東アジア仏教史の展開との関連追究が、新しい研究課題となっている。山林寺院に注目したいくつかの論文は、このことを意識したものであり、かつてから論じられている中世の村落寺院とあわせて、地域社会が仏教を組み込んで成立した実態と意義を考察しつつある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①上川通夫、院政期真言密教の社会史的位置―大治と建久の間―、仏教美術研究上野記念財団助成研究会助成研究会報告書第 39 冊『研究発表と座談会 仁和寺御流を中心とした院政期真言密教の文化と美術』、2013、pp.11～21、査読なし

②上川通夫、摂関期の如法経と経塚、関西大学東西学術研究所紀要第 46 号、2013、pp.33～50、査読なし

③上川通夫、なぜ仏教か、どういう仏教か、日本史研究 615、2013、pp.122～128、査読有

④上川通夫『平家物語』と十二世紀日本仏教、軍記と語り物 48、2012、pp.20～29、査読有

⑤上川通夫、日本中世の災害と思想、愛知県立大学日本文化学部歴史文化学科編 3、2012、pp.23～36、査読なし

⑥上川通夫、十二世紀日本仏教の歴史的位置、歴史評論 746、2012、pp.4～18、査読有

〔学会発表〕（計 13 件）

①上川通夫、12 世紀の起請木札、木簡学会、2013 年 12 月 7 日、奈良文化財研究所

②上川通夫、平安京と仏教―アジア・京・山寺―、日本史研究会、2013 年 11 月 30 日、機関誌会館（京都）

③上川通夫、世界史のなかの尾張・三河中世文書、名古屋歴史科学研究会、2013 年 7 月 25 日、名古屋大学

④上川通夫、中世的時空観の成立、国際日本文化研究センター共同研究会、2013 年 6 月 16 日、国際日本文化研究センター

⑤上川通夫、普門寺（愛知県豊橋市）史料と中世山林寺院研究、鎌倉遺文研究会、2012 年 12 月 20 日、早稲田大学

⑥上川通夫、十二世紀日本仏教の歴史的位置―合戦と和合―、軍記・語り物研究会、2011 年 8 月 30 日、鶴見大学

⑦上川通夫、日本中世の災害と思想、2011 年 11 月 10 日、ブラジル・サンパウロ大学

⑧上川通夫、十二世紀日本仏教の歴史的位置、歴史科学協議会、2011 年 11 月 26 日、立教大学

〔図書〕（計 3 件）

①上川通夫、塙書房、日本中世仏教と東アジア世界、2012、377

②上川通夫 他、清文堂出版、国境の歴史文化、2012、338

③上川通夫 他、勉誠出版、方法としての仏教文化史、2010、560

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
上川通夫（KAMIKAWA,Michio）
愛知県立大学・日本文化学部・教授
研究者番号：80264703
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし